

研究報告

JSL 高校生における読解の難しさはどこにあるのか —タスク別のスコアの比較と回顧的思考発話法を用いた読解過程の観察—

布村 猛 (山梨大学)

1 本研究の背景

いわゆる「読解」活動は日本の高等学校における国語科教育の中で中心的な活動の1つである。JSL 高校生について日本語での「読解」は何度の高い活動であり、読解でつまづき、授業についていけなくなった結果、高校での学習、大学などへの進学に深刻な影響を与えていることが指摘されている(筒井:2017)。JSL 児童の増加に伴い、JSL 高校生が今後さらに増加することが予測される中でこの問題の原因となる「読解」の難しさの所在を明らかにし、指導法・教材を改善することは「JSL 高校生の学習環境の整備において重要である」と考えることができる。本研究では、JSL 高校生にとって難易度の高い読解タスクを明らかにするために複数の読解タスクを含むテストを実施し、タスクごとのスコアを比較する。その後、スコアの低いタスクについて JSL 高校生が取り組む際の思考過程を明らかにするために、回顧的思考発話法を用いたインタビュー調査を行う。

2 第二言語で読解を行う難しさの要因

第二言語で行う読解活動について、大きく分けると文章の持つ特性と学習者の持つ特性が指摘されている。文章の特性については李(2016)などが(i)語彙の難しさ(ii)文法の複雑さ(iii)文の長さなどを挙げている。一方、学習者の持つ特性については carl1el(1998)などが(i)背景知識の不足、(ii)スキーマ活性化の失敗、(iii)スキルの不足(iv)読解行為への誤った認識(v)読解テーマへの興味などを挙げている。しかし、いずれの研究においても読解活動の難しさの要因として決定的なものを挙げることはしておらず、学習者の置かれている環境の影響を受けるものであることを指摘している。そこで本研究では JSL 高校生が抱える読解の難しさの要因について明らかにすることを試みる。

3 方法論

本調査は都立高校に在籍する JSL 高校生 12 名を対象に読解力を測るためのテストを実施し、その後 6 名を対象にインタビュー調査を行った。学習者の日本語レベルは全員 N3 以上(N3:7名、N2:4名)で、母語はネパール語 7 名、タガログ語 3 名、中国語 2 名であった。読解力を測るためのテストでは、1000 字程度で書かれた日本語能力検定 N3 レベルのテキストを読み、書かれている情報を正確に取り出すことを求める「情報の取り出し」、書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり、推論したりすることを求める「解釈」、テキ

ストに書かれていることを知識や考え方、経験と結び付けることを求める「熟考・評価」をタスクとした設問への回答を求めた。一度にテストを実施することで、問題間で集中力などに差が出ないようにするために、テストは5日間をかけて1日2問計10問で実施した。その上で、それぞれのタスクのスコアに有意差が見られるかを検定し JSL 学習者にとって難しいとされるタスクを特定し、そのタスクの設問を解く際の思考過程を明らかにするために回顧的思考発話法を用いたインタビュー調査を行った。

4 調査結果

調査を行った結果、タスクの難易度は「情報の取り出し」<「解釈」<「熟考・評価」であることが明らかとなった(「<」は統計的有意差を示す)。そこで「熟考・評価」タスクの設問を解く際の思考の過程についてインタビューを行った結果、①テキストの内容を自身の経験や知識と結びつける段階②自身の経験や知識とテキストの内容を結びつけた内容を日本語としてアウトプットする段階の2つの段階で難しさを感じていることが明らかとなった。また、これらの難しさを感じた要因として①母語でもこのような活動を行う経験に乏しいこと②内容の理解に自身がなく自身の経験と結びつける段階で迷いが生じることなどが JSL 高校生の発話内容から読み取ることが出来た。

5 考察

今回調査を行った JSL 高校生にとって、「読解」の難しさは自身の既有知識や経験とテキストから得た内容を関連付けること、あるいは関連付けた上で日本語にすることにあることが明らかとなった。これは先行研究で指摘されたスキーマ活性化の失敗やスキルの不足が要因になっていることを示唆するものである。このことから、読み手の背景的知識を活用したトップダウン処理を行う練習を取り入れていくことが必要になると考えられる。

付記

本調査を実施するにあたり快く許可をくださった都立高校、また調査に協力してくださった JSL 高校生 12 名にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

【引用文献】

李 在鎬 (2016) 「日本語教育のための文章難易度に関する研究」『早稲田大学日本語教育研究』(21) p. 1-16

筒井千絵 (2017) 「外国人生徒が国語の読解でつまづく要因 : 文法的側面から」『フェリス女学院大学文学部紀要』(52) p. 19-32

Carrell, Patricia L. (1998) Some Causes of Text Boundedness and Schema Interference in ESL Reading. In P.L. Carrell, et al. (eds.), *Interactive Approaches to Second Language Reading*. Cambridge: CUP. p.101-113